

るとその先にちょっと変わった地形が現れる。兩岸の岩がちょうど石門のような感じで並び立ち、その中心に2mのC.S.滝。左岸に踏跡(二俣のあたりから炭焼き釜あとまで続いていた)があったので、それをたどって越す。

このあとも適当に小滝が出てくる。いずれも割と簡単に直登可能。12:25, 水も潤れたので、遡行終了とし、引き返して更に下降を続けることとする。

12:40二俣まで戻り、下降を続ける。すぐ5mの滝。右岸を踏いて下るが、この滝のすぐ下流で合流する支沢には7mの立派な滝がかかっていた。ただ、水量の少ないことが残念である。このあとすぐに北沢本流にて、への沢(仮称)の下降は終了。  
(記・)

[タイム] への沢右俣下降開始(11:15)→左俣出合(11:55)→左俣遡行終了(12:25)  
→右俣出合(12:40)→下降終了(12:50)→山本不動尊(13:30)

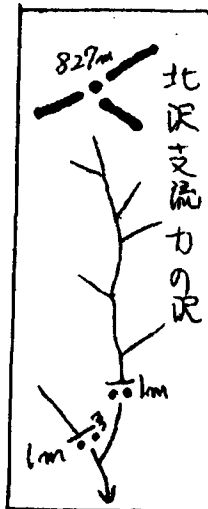
### 北沢支流ワの沢 1988年9月3日

10:40ワの沢(仮称)の遡行開始。出だしに小滝が3つ続けてかかる。いずれも直登。花崗岩のフリクションがきいて、快適。ホールドも多い。ところがである。その上は平凡。岩質も櫛倉破砕帯を構成する黒い岩に変わってしまった。11:10遡行終了。左手の尾根に上がり、への沢(仮称)をめざす。  
(記・)

[タイム] ワの沢出合(10:40)→終了(11:10)

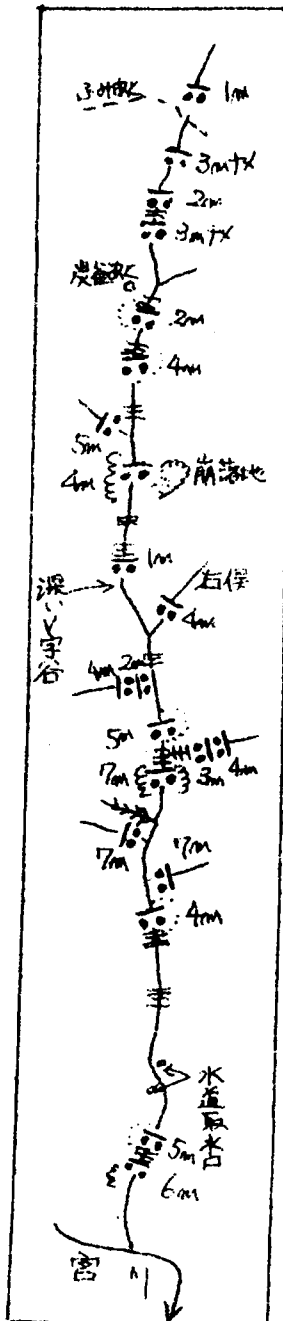
### 北沢支流カの沢 1988年9月3日

9:40, 今は棒杭のみとなってしまった何かの標識の立つ827m独標(尾根上の小さなコブ。展望はきかない)上から、カ(仮称)の沢(仮称)めざして下降開始。急な斜面を下って5分程で沢に出た。ところで、この沢は全く平凡。櫛倉破砕帯を構成する黒い岩層の中を流れている間は、ほとんど滝がかからないという、南沢流域でみられたのと同じ現象があてはまるようだ。1mの小滝



1個があっただけで、10:25北沢本流着。カの沢の下降終了。(記

[タイム] カの沢下降開始(9:30)→下降終了(10:25)



## 宮川支流四ノ沢

1988年9月17日

北沢支流口の沢(仮称)の遡行終了後尾根上の踏跡をたどり、五来山が近くになるあたりで沢に下る踏跡を見つけ、それをたどって宮川支流四ノ沢(仮称)の源頭に出る。下降開始11:25。

小滝をまじえた細い流れが続く。花崗岩の岩床であるから、滝も期待できそう。やがて右岸に炭焼釜の跡を見る。こんな山奥まで炭焼きに通ってきていたのだろう。釜までの踏跡は残っていないので、沢ぞいに通ったのか、それとも尾根筋から下ってきたのか、見当もつかない。

炭焼釜跡を過ぎると、すぐ2mの滝。ホールドがないので、右岸を捲いて下る。いよいよ滝が出てきた。続く4mは左岸を捲いて下る。登ることならできそう。右岸から支沢が合流したあとの4mはクライミングダウン。そのあと沢筋は深いV字谷の様相を呈するようになる。

11:50二俣。下降してきた左俣の方が水量がやや多いが、左俣もすぐ奥に4mの滝をかけ、遡ってみたいという気を起こさせる。後日の宿題にして先に進む。

5mの滝の左岸を捲いて下ったあと、出てきたのがこの沢最大の滝、7m。若干ナメ状。途中までクライミングダウン(かなり微妙なフリクションのきかせ方が必要)してみたが、最後の2m程が下れない。右岸にトラバースぎみに逃げ、倒木に取り付いて下った。登ることはできそう。捲いて下るならかなりの高捲きになる。

このあと沢筋は上砂が堆積して、河原状を呈してきた。倒木が目立ってくる。どうしたのかと思ったら、倒木が集積して自然の砂防ダムを形作っていたのである。そのあと